

## 個人

## 遠野を農的な暮らしができる集落のモデルに

遠野市

伊勢崎 克彦 個人

取材日 2013.08.21

岩手県遠野市の馬搬継承者、農家。遠野を馬と共に林業や農業をしながら、地域の資源で生きていける持続可能な集落にする事を目指して、日々取り組んでいる。東日本大震災では被災地とボランティアをつなぐコーディネーターを務め、また、全国に花・野菜の苗や種の提供を呼びかけて被災地に届け、復耕（復興）支援をした。

## 3月11日 14時46分

図書館で映画「降りてゆく生き方」のスタッフ上映会を行なっている時、これまでには経験した事のない、強い揺れの地震が来た。かなり揺れたため本棚などが倒れる危険性があり、外に出る指示が出され、上映会は何となしに中止になった。図書館の目の前にある川を見ると、水が濁っている。「かなり大きな地震だったんだな」と思い、すぐに自宅に帰った。

その後3日ほど停電した。ガスはプロパンガスで水道も止まらなかったの、困ったのは電気がかさず暗かった事くらいだ。薪ストーブで暖を取り、食料は家にあるものを食べた。ガソリンは手に入らなかったの、なるべく歩くようにして節約した。

## 「復興する、未来はある」

遠野市宮守町にある柏木平レイクリゾートの多田一彦社長は、震災が発生してからすぐに支援物資を積んで被災地を訪れた。震災から5日後、柏木平レイクリゾートの社員である僕も、多田社長と一緒に物資を持って岩手県大槌町へ向かった。テレビで被災地の状況は見ていたので、大変な状況だろうと分かっていたし、もしかしたら山なども無くなっているのではないかと思っていた。ところが、現地に着くと悲惨な状況が目に見えてきたものの、地震や津波で壊れてしまったのは人間が作ったものであって、自然のあるべき姿である山や川は残っている。率直に「すぐに復興する、未来はある」と感じた。

それから約1ヶ月は多田社長と一緒に被災各地を回った。どこに物資を届けたら良いのか分からないような混乱があり、土地勘がない方々のために避難所の場所と人数、リーダーを記した地図を作った。また、被災地の状況を内陸部に伝えて支援を呼びかける事が役割だと思ったので、現場で御用聞きをした。初期の要望は食料だったが、だんだんと調味料、長靴、服などに変わった。



## 「遠野まごころネット」設立

被災地を見た多田社長が何とかしなければと考え、「遠野の風土と観光（産業）を考える会」（略称＝遠風会 [えんぷうかい]）<sup>\*</sup>のメンバーと集まり、連携を呼びかけた。この連携が後に、遠野市民を中心とした岩手県沿岸部の被災者支援ボランティア集団「遠野まごころネット」設立につながっていく。

阪神・淡路大震災で支援に携わった、被災地NGO協働センターの村井雅清さんが、被災地を支援するために遠野に来ると聞いた。当初、多田社長や僕は災害支援ノウハウを持つプロの人がいるならば、任せようと考えた。僕達はプロが来るまで現地の情報収集をして、次の支援活動につなげようと思っていた。

2011年3月25日、被災地NGO協働センターの村井さんが遠野へ来た。災害支援のノウハウを教えてくださいと、きちんと団体として組織化し、いろいろな支援者と連携しなければ対応できない事が分かった。日本では社会福祉協議会がボランティアを扱っているの、遠野市社会福祉協議会にも連携を要請した。遠野市社協の常務理事、佐藤正市さんが理解のある方で、協力してくれた。こうして3月28日、「遠野まごころネット（遠野被災地支援ボランティアネットワーク）」が立ち

上がった。

※「遠野の風土と観光（産業）を考える会」（略称＝遠風会 [えんふうかい]）…2011年1月に立ち上がった。地域おこしをしようと志ある人達のネットワーク。

## 支援の拠点となった遠野

大槌町の社会福祉協議会が地元の方々からの要請を受け、瓦礫撤去作業を始めたが、圧倒的にマンパワーが足りていなかった。遠野まごころネットが最初の支援に向かったのは、大槌町桜木町地区だ。桜木町地区は津波により家屋1階天井まで浸水の被害はあったものの、流失した家屋が比較的少なかった。浸水した1階を片づければ、何とか2階で暮らせるまでに住居を回復できる。避難所生活者を少しでも減らしたい思いで桜木町地区から支援をスタートした。

被災地は混乱しているので、コーディネートが本当に大変だった。遠野は被災地とつなぐ支援拠点となり、東京などから大勢のボランティアがやって来た。ボランティアに瓦礫撤去の作業であると説明し、バスに乗せて現場へ行くけれども、状況は刻々と変化しかつ混乱しているため、最初から段取りが決まっているわけではない。行った先で現地の方と交渉した。周辺は瓦礫の山で、バスをどこに停めたらよいかも分からない。現地の方とボランティアの狭間で調整した。首都圏からは、被災地のために何か手伝いたいとやる気満々でボランティアにやってくる。時には「気持ちは分かるけれど、待つ事もボランティアの仕事だよ」と声をかけ、今は非常時で現地がとても混乱している事を理解してもらった。

## 社会福祉協議会との連携と課題

大槌町では多田社長も僕もどこの馬の骨か分からない。大槌の方々に片づけを手伝うと申し出ても「ここはおらほのところだから、自分達でやる」と断られ、最初は壁があった。だけれど被災地で社協のビブスを着ていると、僕達は社協の人間ではないが、現地の人達は社協の人間だと思ってしゃべる。そうした点では現場での支援マッチングがスムーズになる事もあった。

西日本の県社協からは、1～2週間ずつの交替で人員が派遣され、被災地に入っていた。しかし、同じ人が長期に滞在しないので、地元の方と築いた関係性などは引き継ぐことができない。新しく来た方は土地勘もないので慣れるまでに時間がかかる。せつかく社協として支援体制を作り、申し送りをしても状況は刻々と変わり、社協の支援体制はなかなか構築されなかった。こうした状況を



撮影：2011.6.16 岩手県遠野市  
三陸エコビジョンフォーラム実行委員会

何とか解決できないかと県社協に提案したが、この課題は解決されなかった。

## 被災地に持続可能な種を

被災地に通っていると、「土いじりをしたい」「お花が好き」という声が聞こえてきた。野菜が採れる時期ではないため野菜は無かったが、周りに呼びかけると種が集まってきた。しかし、集まってくるのは全てF1品種（次の世代を生まない品種）の種だった。僕は、種取りをしてまたまいて実る種を渡したかった。本当に被災地が復興する事を考えると、持続可能性のある本物の種をまきたい思いが強くなったからだ。遠野の有機農家や、埼玉で「たねの森」という固定種や在来種を扱っている種屋さんをお願いをしてみると、種を送ってくれた。

最初に被災地へ行った時、避難所にいるおばあちゃんが「来てくれてありがとう」と言ってくれた。そして「戦争の時は誰も来なかった。食べ物も無かった。今回はこれだけの被害があったけれども、大勢の方が来てくれて、食べ物も持ってきてくれて、ありがとう」と言った。でも、そのあと「これからは物がたくさんあるのが良いのではなくて、昔に戻らなきゃダメなんだな。でも若い人達には昔に戻っては言えないからな」としみり言っていたのがとても印象的だった。僕達の生活している現代の社会システムは完全に破綻している。物質的なものが無くなって、新たに町が興る時に、これまでとは違う価値観が生まれるだろうと思った。復興するプロセスの中に、良い意味で世界が抱える問題を解決する希望があるのではないかと感じていた。被災地の人達がどう感じたかは分からないが、そうした想いを被災地の方に説明しながら、種や苗を配った。

## 大震災を振り返って

その土地で誇りを持って住んでいる「人」がとても大事な要素だと感じた。地域の世話役、リーダーがいろいろな意味で良い人だと、非常時でもその地域は何とかやっていける。結局、場所や物は変わらないけれど、住む人によって地域は変わってくる。その地域にどんな人材がいたのかに尽きると思うし、遠野も多田社長をはじめとするリーダーがいたからこそ、さまざまな団体が集結して行動する事ができたのだと思う。

## 遠野を持続可能な集落のモデルに

馬搬を始めて4年が経つ。山の事も初めは分からなかった。お金持ちではないのでレジャーで楽しむ馬は持てないが、働く馬は生きていく上で必要とするものだ。遠野に馬と働く仕事があるならば、馬と一緒に生活ができると思ったのが始まりだ。馬は機動力があるので馬搬もでき、田畑を耕す事もできる。馬搬や農業に携わっていると家畜の重要性がよく分かる。昔の人は牛や馬などの家畜と共に暮らしていた。家畜の力を借りて農作業を行ない、田んぼの畦の草は家畜の朝ごはんに刈り、家畜の排泄物は田畑で肥料として使った。資源を有効に活用する考え方が当たり前で、循環型の暮らしが普通に営まれていた。また、農的な生活からは神社や祭りなどの文化が育まれてきた。しかし、そうした農村の循環型の暮らしは無くなりつつある。今は田んぼの畦の草は焼かれ、無駄になっている。集落から人は出ていくばかりで、第一次産業から離れる人も多い。僕が小さい頃と比べると、明らかに川は汚くなっているし、生き物も少なくなっているのを肌で感じる。集落に人が住まなくなり、第一次産業から離れる人も多くなれば、循環型の暮らしや神社、祭りなどの文化は必然的に無くなってしまっただろう。

現代は規模を拡大する農業や林業が、第一次産業のスタイルと捉えられている。どのようなライフスタイルを選択するかにもよるが、換金の目的だけで農業を見ると、確かに規模を拡大しなければ農業だけで生活していくのは厳しい。しかし、農業だけを拡大するのではなく、林業も釣りもするし、得意分野を活かして山のガイドやパラグライダーのインストラクターもすれば生活はできる。いくつも仕事を持っていて良いと思う。

昔は都会に憧れたけれども、人間がロボットを作ったとして、どんなに人間に近づけてもそのロボットは人間にはなれないし、僕達は新しくハエや蚊を作り出す事はできない。結局、本物に勝るものはない。農的な仕事の面白みは本物を作る事であり、やるほど面白い。農業には何年も続け



撮影：2011.8.4 岩手県遠野市  
遠野まごころネットの拠点となった遠野市総合福祉センター

ば蓄積されていくものがあり、農村にはさまざまな可能性があると思う。これから遠野に「馬搬の森」を作りたい。集落の水源地の森だ。そこから皆が水を取り、僕はその水を使って自然栽培で米を作る。1つの水系に恩恵を受けている持続可能な集落のモデルのイメージだ。1人で広い面積で大規模な農業をするのではなく、その地域に住む人達がどれほど小さな面積でもよいから農業を暮らしの中に組み込み、農的な暮らしができる集落を再現したい。本当は被災地でできると思ったが、そこに住む人達の中にやりたいと思う人がいなければ成り立たない。だから、自分が住んでいる地元、コントロールできる場所で、住まい方を楽しく提案していきたい。遠野は地元の方もいて、外から来る人もいて、集落の中にも僕のことを分かってくれる方がいる。おそらく新しい集落に変わっていくだろう。



撮影：2013.8.21 岩手県遠野市 (EPO東北スタッフ撮影)